

論文の内容の要旨

論文題目：

判断と崇高

カントと美的・政治的判断力における決定の問題

氏名：

宮崎 裕助

依拠すべき法が与えられていないにもかかわらず法に基づいた判断を求めている当のものをめぐって、ひとはどのように判断するのか。そのような判断（のアポリア）への問いは、カント『判断力批判』（1790年）に遡る伝統において、反省的判断力、とりわけ美的判断力の問題としてはじめて明確に提起され、20世紀にあっては、政治的判断力ならびに決断主義の問題へと引き継がれ、絶えず問い合わせられてきた。このとき、判断力をめぐる探究は、美的な観点からは「崇高の思考」として、政治的な観点からは「決定の思考」として特徴づけることができる。かくして見出されるのは、判断の問題を、カントと現代の思想（アーレント、リオタール、シュミット、デリダ）を結ぶ問いの布置のなかで立て直し、ひいては美学と政治、ないし「美的なもの」と「政治的なもの」の関係のもとに再検討するという課題である。本研究の目的は、この課題の追究を通して、カントの判断力論を「決定の問題」のもとに再構成すること、そしてその現代的な可能性を探るなかで、判断と決断の理論一般に新たなパースペクティブを切り開くことである。

第1章「判断力の法」では、そもそもカントの批判哲学にとって、なぜ判断力が問題の焦点となるのかが問われた。『判断力批判』の序論は、判断力に対して、批判哲学の全体を完結させるという体系的役割を与えていた。このことの意味を探るために、本章は、判断力の概念を『純粹理性批判』と『実践理性批判』も含む問題連関において追跡し、当の判断力がいわば「試行的立

法」という働きを担うことで、批判哲学の自己実現にとっての原動力となることを指摘した。そこから明らかになったのは、判断のこの自己立法的な構造のもとに、カントの批判哲学が「決断」の自由と困難をめぐる思考として現れてくるということである。こうした判断力概念の意義のうちに、本章は、判断のアポリアへの問い合わせ——本論の中心課題である「決定の問題」——が次章以降で『判断力批判』の問題系を通じて追究されるべき必要性とその諸前提を示した。

第2章「判断の崇高」では、「反省的判断力」の概念のもとに見出された判断のアポリアが、どのように美的判断力の問題として展開されるのかが問われた。ここで本論が着目したのは、カント美学における崇高論の位置である。従来のカント研究では、カントの崇高論の理論的な重要性は十分に解明されてきたとは言えない。本章が示したのは、なぜ『判断力批判』の崇高論が（「美的分析論」に比して）重要なのかという点、そしてこのことが、カントの「崇高の思考」として、どのように美学批判の射程をもつのかという点である。本章はこの論点について、これまで看過されてきた（ハイデガー以後の）フランス思想のカント受容の達成を踏まえながら、一方で、美的判断がアポリアに陥る呈示不可能性、そして他方で、この判断を「詐取」の論理を介して可能にする崇高の呈示可能性という両者の関連のうちに明らかにすることことができた。

以上が本論の第I部「判断——反省的判断力から美的判断力へ」である。第I部の要点は、判断のアポリアへの一般的な問い合わせに始まり、それを『判断力批判』の反省的判断力の問題を通してカントの「決定の思考」のもとに見出し、かつそこから、美的判断力の問題を通して「崇高の思考」のうちに当の判断の問い合わせを定位したという点にある。続く第II部「崇高——構想力と美的形式の問題」（第3・4章およびInterlude）は、カントの「崇高の思考」そのものを検討の主題とし、判断をめぐる問い合わせがカントの崇高論の問題圏のうちに実際にどのように現れてくるのかを具体的に分析することにあてられた。

第3章「構想 - 暴力」では、まず『判断力批判』における構想力が、『純粹理性批判』とは異なる仕方で、いかなる働きをもつのかが問われた。結果、感性と理性のあいだで構想力が果たしている注目すべき暴力（構想 - 暴力）の機能が明らかになった。すなわち、この暴力は、構想力が自己の限界に直面することで自己自身にとって破壊的かつ構成的に働く二重の暴力であり、それによって崇高と判断されるところの自己犠牲の暴力にほかならない。この過程は、自己陶冶による開化=文化の超越論的原理を説明する一方、まさに構想 - 暴力として、この原理そのものを破壊してしまうような構想力の野蛮な威力をも示唆している。本章は『判断力批判』における構想力の過剰な暴力を、崇高の呈示そのものの臨界点に位置づけることができた。

第4章「吐き気」では、構想力の暴力に見出された崇高の呈示の臨界点が、いかなる感性的経

験のうちに現れてくるのかが問われた。そこで選ばれた主題が「吐き気」である。そもそもこの主題は、バタイユの不定形の美学を介して現代美術の際立った問いの場——アブジェクションの問題——を形成している。本章は、この問題圏との関連を考慮することで、従来看過されてきたカントの「吐き気」論のアクチュアリティを浮かび上らせようとした。結果、バタイユにおける「吐き気」の対象が不定形なものとの連想で理解されたのに対し、カントにあって「吐き気」は、たんに形式的でも不定形でもない「怪物的なもの」との関わりをもつことが明らかになった。そこから本章は、美でも崇高ですらもない、反美学的な第三の感情——「パラサプライム」と呼ばれる——として、この「吐き気」概念の核心を説明するに至った。これは、従来の美学的図式に収まらない『判断力批判』の感性論の現代的な射程を解明するものであり、本論が追究するカントの「崇高の思考」の到達点を立証するものである。

補章 Interlude 「物質的崇高」では、カントの挙げている崇高なものの具体例に注目し、そこで問われた自然風景の視覚（星空と大洋の例）が、どのように崇高の否定的表出の論理を限界づけているのかが問われた。この例を考察した研究に、ポール・ド・マンの『判断力批判』読解がある。本章は、ド・マンの提出している建築術的視覚と物質的視覚との緊張関係を説明し直すことを通じ、カントの美的判断が「視覚の物質性」の契機をモチーフとしつつ、美学のイデオロギー作用（政治と倫理の美学化）に対する批判力をもつことを明らかにした。これは、『判断力批判』の美学批判の政治的射程を示唆し、第 III 部の問題提起への架橋的な役割を担う。

以上が第 II 部である。第 II 部の要点は、『判断力批判』の崇高論の再読を通じ、崇高なものの否定的表出の論理がカント美学の表象体系にとっての超越論的原理を担うことを解明したという点、のみならず、まさにこの論理の限界を問い合わせる具体的な諸相（「構想 - 暴力」「吐き気」「視覚の物質性」）を分析することによってカントの「崇高の思考」を明確化したという点にある。続く第 III 部「美的 - 政治的——美学化と決断主義への抵抗」（第 5・6 章）では、以上に示された「崇高の思考」が、判断力論としていかなる美的かつ政治的な射程をもって展開しうるのかを、20 世紀の思想における「政治的判断力」および「決断主義」の問題に即して明らかにすることが試みられた。

第 5 章「政治的判断力」では、アーレントが『判断力批判』解釈から取り出した「政治的判断力」の概念が、カントの崇高論の観点から検討されるとき、いかなる限界をもち、いかなる方向へと刷新しうるのかが問われた。そもそもアーレントの政治的判断力は美の判断をモデルとしており、従来の政治的判断力論では崇高の問題への視点が欠落していた。本章は、これをリオタールの崇高論読解と突き合わせることで、前章までに追究してきたカントの「崇高の思考」に立脚

する、新たな政治的判断力論の可能性を切り開くに至った。他方、崇高の感情を介した政治的判断の理論は、ファシズムの「政治の美学化」（ベンヤミン）にみられるような「崇高の政治」に近づく。本論は、そのような危険を最大限に意識しつつ、カントの「崇高の思考」の核心がむしろ美学批判にあったことを喚起することで「政治の美学化」を斥け、民主主義への過信（美的政治）でもファシズムへの退却（崇高の政治）でもない「到来としての政治」という第三の観点を打ち出した。

第6章「決断の帰趨」では、引き続きファシズムと政治的判断力の関係が考慮され、それが決断主義の問題として問い合わせられた場合に、決定としての政治的判断の思考は、いかに決断主義とは別の政治の可能性を開きうるのかが問われた。そこで焦点となったのが、シュミットとデリダの決断＝決定の理論である。シュミットとデリダの二つの決定論の関係は従来明確に示されたことがなかった。両者は、決断の無条件性を強調する点で並行しているが、その違いはどこにあるのか。一方で、レーヴィットが批判したように、シュミットの主権的決断主義は、決断の権威を国家主権へと実体化することで、決断主義を廃棄する決断、つまり（シュミットが「政治的ロマン主義」として非難していたはずの）非決断の政治へと反転する。他方で、デリダの「決定の思考」は、決断の無条件性をあくまで計算不可能な正義への権利として要求し続けることで権威の実体化を批判するのであり、決定の可能性を無限に押し開こうと試みるのである。結果、デリダの「決断主義なき決定」の思考は、デリダの準・カント的な理想主義の政治を裏書きするとともに、決断の切迫性を最大限に高めようとする「誇張法的」パトスに支えられた「美的・政治的」実践であることが明らかになった。ここに本章は、デリダの「決定の思考」のうちに、ファシズムを導いた決断主義の政治への抵抗点を標定し、決断主義に帰結しない決定／判断の政治の最終的な可能性を指し示そうとした。